

# 格差拡大社会とグローバリズム

21世紀は不穏な戦争とともに幕開けされ、世界は不確かな未来の中でその不安を増大していった。グローバル化する世界資本は全世紀末に既に社会主義を排斥して、一元化した資本の価値認識を押し付け、なお巨大化しながら、一方にその結びともいえる数々の矛盾を促進していった。そのことがいま、格差社会と呼ばれる不平等な労働形態に関与していることは疑いのない事実である。しかし、それはただ資本との関係の中だけで生成したのではなく、近代がその出発期から抱え持った不均衡な国民国家の構成に起因していると思いたいほど、植民地主義の残滓を感じさせるものである。

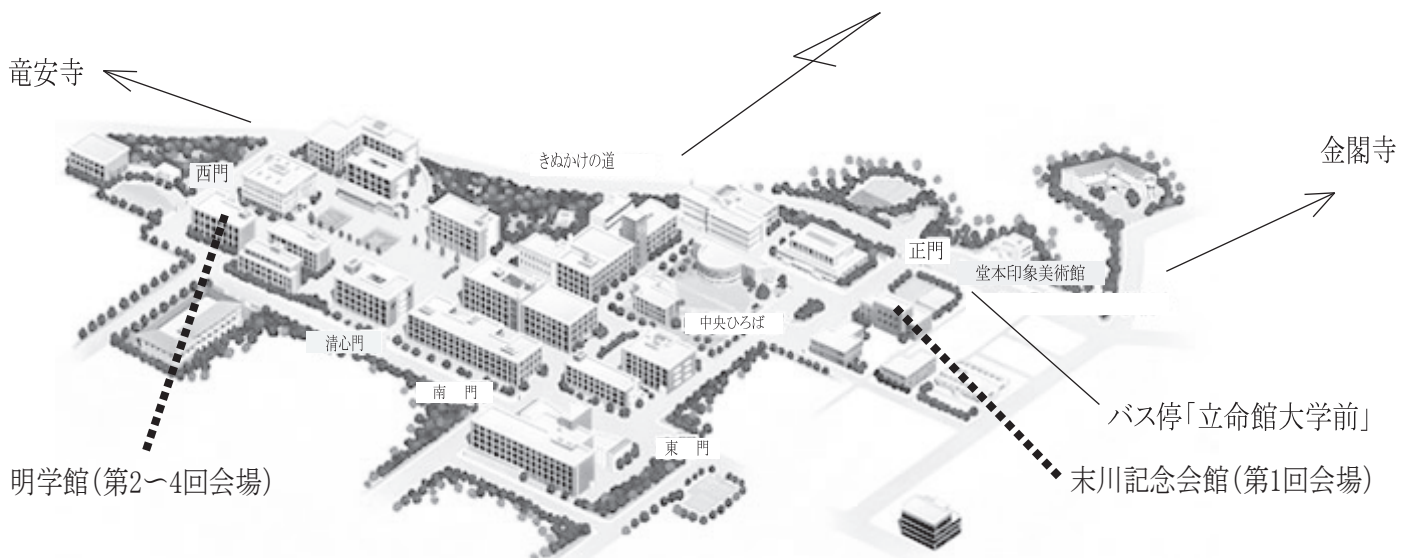
ここで言う「植民地主義」とは具体的な領土侵犯だけではなく、その行為を正当化させる意識のあり方をも含めて呼称する概念でもあるが、ポスト植民地の世界状況は過酷なまでの人間疎外を実施、断行したのである。それはあたかも前世紀以前の階級社会を髣髴とさせるほどの不平等な様態を示していた。グローバル経済の無国境の侵略は、世界の貧困を生産した。近代労働問題の中心的なテーマであった永続的な雇用の安定、労働と等価に結ばれた賃金体系、男女格差のない労働条件など、その長年にわたる営為によって改善されてきた労働問題は、またたくまに霧散して、まったく逆の方向に進んでいる。格差社会という言葉は定着して、いかにそこに陥らないかが主要な課題であって、この問題に真正面から取り組もうとするには、社会の防衛的なシステムはあまりに壊れてしまっている。長時間労働、男女格差、雇用の不安定、賃金体系の劣化など、語りだせばとまらなくなるような話題が次から次に噴出し、ワーキングプアやフリーター、ニート、ネットカフェ難民などという言葉が巷を徘徊した。

こうした社会状況は80年前の小林多喜二の小説『蟹工船』をベストセラーへと押し上げ、『ホームレス中学生』という貧困をテーマにしたエッセーは200万部売れた。文学や大衆文化の中で確実に「貧困」というテーマはリサイクルして蘇ったのである。しかし、それらは実は「貧困」が新しい「商品」となって浮上したことをも表明している。実際に被害を蒙っているのは誰かという問いを立てて、今回の第19シリーズ「格差拡大社会とグローバリズム」は発案された。シングルマザーなどジェンダー別によって社会的生産労働様式から排除されていく人々について、具体的な問題をここで詳らかにしていきたい。そのことは法という範疇の中で生存権の問題としても鋭く問いかけたいと考えている。また文学という現在かくも弱体化されてしまった領域からこの格差の拡大という深刻な問題を照射すると、一体何が見えてくるのか、二回にわたって考えていく。

格差はどのような国家、社会、人種や男女間の上にもある。だが、ここで考えていきたいのは、あたかも事前的に宿命付けられたかのように錯誤する人間の労働に関する能力の格差は、実は歴史的、文化的な構築物であるということだ。そしてそのことをもって人間を「分別」、「整理」していく思考法の誤りを気づいていけたらと願う。大学などのアカデミックな諸機関は、まさしくこの「分別」や「整理」の方法についてを会得し、決して「分別」されたり「整理」されないための場所となっていることに重点をかけながら、限りなく格差が拡大していくこの社会に何が起きているのか、それを止めることの出来ないのは何故なのかという虚心の問いを発し続けていきたい。

立命館大学国際言語文化研究所長・中川成美

## 会場案内(立命館大学衣笠キャンパス)



JR京都駅から市バス50にて「立命館大学前(終点)」下車すぐ、または市バス205(西大路方面行き)にて「衣笠校前」下車+西へ徒歩10分 [詳しくは大学ホームページをご参照下さい]